Shukugawa Gakuin College

制作概要

私達は二次元（平面）上に描かれた図や写真をどのように感じ、知覚しているのか。「図」と「地」の関係は造形上、重要な命題であり、ビジュアルコミュニケーション・デザイン、とり分けグラフィック・デザインも例外ではない。アーティストやデザイナーが見る者を意識して制作する以上このことを抜きに語ることはむずかしい。この命題が私にとっては表現の原点であり研究制作の目的の一つでもある。

アートが唯一の作品として完結するのに対しグラフィック・デザインは、「図」に相当する絵や写真を精巧に再現し、大量に印刷することで完結する。そのために用いられるのが写真印刷法であり、製版上、不可欠なのが各種スクリーンである。最も一般的に用いられるのが網点スクリーンで、その他に万線、同心円、砂目、モザイクなど特殊な効果を出すためのものもある。スクリーン自体が印刷物の「図」を成立させる「図」でもある。その最小単位の点、線、面は規則的な位置関係を保ち、１インチ間に60個＝60線（新聞写真）～300個（カラー写真印刷）が配される細かさである。印刷物でこれらの点、線、面を肉眼で感じるのは60線以下の余程粗いものである。これらの微妙な大小、起伏、明暗が全体図の形と明暗を表現する。

印刷スクリーンについてやや説明を加えたのは、印刷を媒体としたグラフィックデザインの図や写真が成立する所以と私の作品の内容とが深く関わっているためである。私の作品の一部は制作順が点から始まり線、面へ、また平面から立体へと移行している。が、一貫して図が成立する原点を印刷スクリーンの原理に求め、応用したものが多い。作品の全体図を形成する最小単位であるスクリーンの幾何学的、抽象的な点、線、面に具象的な図柄を置換した場合果たしてどのように全体図が見えるのか。ここに1979年～2002年の作品をまとめてみた。

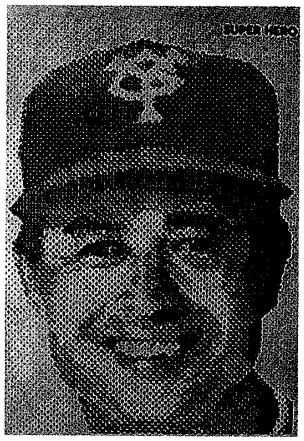
小川 忠彦

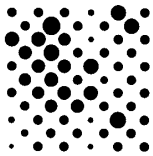
ポスター「SUPER HERO」
～「2002 個展」

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

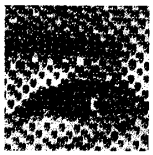
● 点からの展開





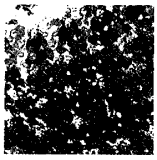
網点スクリーン

作品部分（拡大）



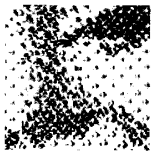
①「SUPER HERO」デザインフォーラム '79 展
1979年 蛍光紙にシルクスクリーン 1030×728 mm

切手ほどの王選手(当時)の網点顔写真をB-1サイズに拡大し、網点の位置に、網点の大きさと同じ王選手の顔写真を配置した。近くでは王選手の小さな顔が、離れては王選手の大きな顔が浮かび上がる。この様に画面を見る距離の違いにより、同一画面上で複数の図柄が見える多義図形として最初に作品化したもの。



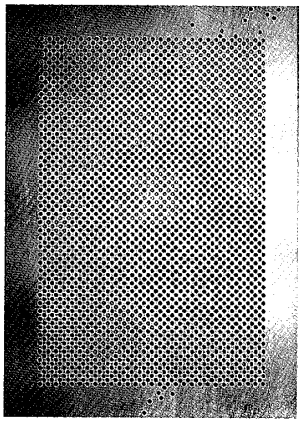
網版を3版重ね合わせた時の拡大図

作品部分（拡大）

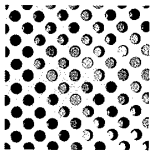


②「マリリン・モンロー」小川忠彦ビジュアルイリュージョン展
1982年 ケント紙にシルクスクリーン 1030×728 mm

3種類の異なった表情のモンローをカラー印刷法のようにC(シアン)、M(マゼンタ)、Y(イエロー)の3色で刷り重ねると新たに異なったモンローの大きな顔が現われる。見る距離により4種類のモンローが見え隠れする。視覚情報量とその伝達効果の可能性を探る実験作で映画フィルムらしくレイアウトした。



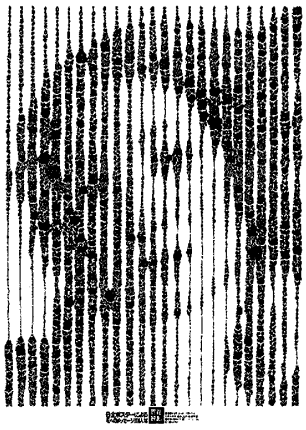
作品部分（拡大）

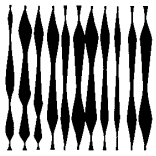


③「WOODY MONA LISA」小川忠彦ビジュアルイリュージョン展
1994年 シナベニヤ合板 1275×930×30 mm

モノクロ写真印刷法の網点は①のように規則的な位置に大きさの違う点が配され、図柄と明度段階を表現する。この作品はインクを使わず、点に大小をつけず、立体化できないかを問うた作品。直径約 12mm、12段階の 深さの違う2480個の穴に斜から光が射すと穴の深浅が影の大小に代わりモナリザが微笑む。

● 線からの展開





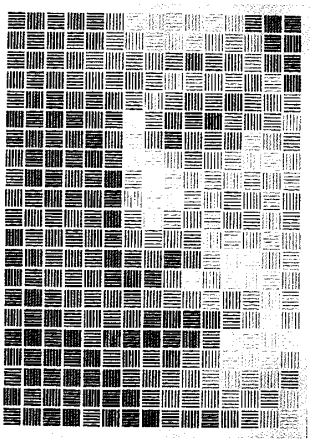
万線スクリーン

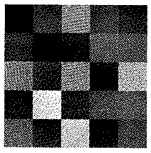
作品部分（拡大）

④「フラワービーナス」第1回メキシコ国際ポスター・ビエンナーレ展
第9回ラハティ・ポスター・ビエンナーレ展
1990年 ケント紙にシルクスクリーン 1030×728 mm

ビーナスの顔を万線(平行線)スクリーンで分解し、その起伏に合わせて花柄を配した。近くでは花柄が、離れてはビーナスの顔が見える。花の色と葉の色の明度を等しくすることにより万線が鮮明になり、ビーナスの顔も鮮明になる。

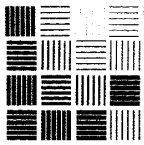
● 面からの展開





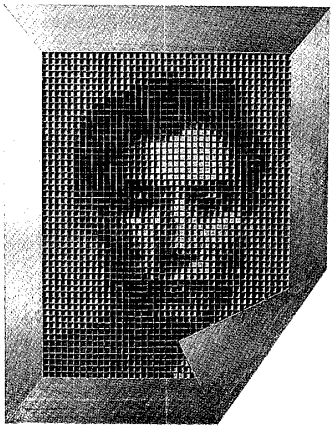
モザイクフィルター

作品部分（拡大）

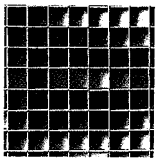


⑤「スクウェアー・ビーナス」小川忠彦WOODY&GRAPHIC展
1997年 ケント紙にシルクスクリーン 1030×728 mm

①②は点、④は線により図柄が表現されているが、これは面で図柄が表現されたものである。グリッドに分割された各面に6本のブルーグリーンの垂直線と6本のレッドの水平線を市松状に配し、線の太さの違いにより明度段階を表現している。近くでは幾何模様、離れてはビーナスの顔（部分）が見える。



作品部分（拡大）



⑥「WOODY GRID SELF PORTREIT」小川忠彦WOODY&GRAPHIC展
2002年 シナベニヤ合板 738×570×25mm

④と同様の面的表現を立体化した作品。厚さ0.6mmのへぎで格子を組み、一辺10mm,約1900個の仕切られた正方形内に10×10mmの角柱を挿入する。原図の明度と角柱の長さを比例させることで斜から光が射すと深浅が影の大小に代わり自画像が現われる。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

小川　忠彦
個展ポスター小川忠彦WOODY&GRAPHIC展
2002年7月
紙にシルクスクリーン
1030×728mm

NII-Electronic Library Service